

大学院派遣研修報告書

所属校	国分寺市立第一中学校	氏名	小玉 容子
派遣大学院	東京学芸大学大学院 教育学研究科	専攻・コース	学校教育専攻・教育方法学領域
研究テーマ	中学校における「総合的な学習の時間」の課題と充実のための方策 ～「生徒と共に創る」という視点から～		

I 研究の概要

(1) 研究テーマの設定と研究目的

1990年代、「ゆとり」の中で子どもたちに「生きる力」をはぐくんでいくことを目的とした教育政策が打ち出され、その後、この路線に沿って、中央教育審議会や教育課程審議会は、学習指導要領を改訂、教育内容や授業時数を削減、学校五日制などを制度化、平成14年度には、全国の小中学校に「総合的な学習の時間」（以下「総合的な学習」と記す）が創設された。ゆとりを確保し、「生きる力」をはぐくむための諸政策であった。

しかし、昨今のマスコミ報道では、その本来の「ゆとり」の趣旨が誤解・誤用・拡大解釈され、いわゆる「ゆとり教育」が学力低下・学級崩壊などを生み出した主たる要因であるかのようにとらえられている。また、文部省や文部科学省への批判がますます強まる中で、平成16（2004）年には、OECDの学力到達度調査（PISA）などの結果が出され、日本の子ども全体の学力が低下したかのように報じられている。「総合的な学習」が学力低下の元凶であるかのような記事や、「総合的な学習が廃止されるのでは」と思わせる前文部科学大臣の談話も発表され、「ゆとり教育」批判の報道に、ますます拍車がかかった感がある。

そんな中、平成16（2004）年に、「総合的な学習」に関する特筆すべき動きがあった。まず、5月、前文科省大臣より中央教育審議会に対し、「総合的な学習」の一層の充実のための指導上の検討が求められ、10月には、中央教育審議会は答申の中で、「総合的な学習」の一層の充実のための諸政策を提言した。そして、この提言を踏まえ、同年12月26日付けで、学習指導要領が一部改正、告示された。総合的な学習の一層の充実のための諸改正が行われたのである。また、中央教育審議会の初等教育分科会教育課程部会の中に「総合的な学習専門部会」が設置され、審議が続けられている。これは、マスコミが報道しているような「総合的な学習」廃止とは逆の動きであり、今後、ますます「総合的な学習」を充実させ、「総合的な学習」の趣旨を浸透させようとしていることを示している。

では、実際に「総合的な学習」を実践する学校や教師はこの動きをどう見ているのだろうか。学校でどのような授業が実践され、どのような成果を得ているのだろうか。また、生徒たちはどのように「総合的な学習」に取り組んでいるのだろうか。その実態を把握するため、平成16年末に東京都内の中学校60校の教師115人と生徒639人を対象に「総合的な学習に関する調査」（以下『総合調査2004』）を実施した。その結果、これまでの調査では明らかにされていなかった中学校での「総合的な学習」に対するネガティブな見方、消極的な取り組みの実態、問題点が明らかになった。

『総合調査2004』によれば、「総合的な学習」を中学校で実践する事に難しさを感じ（図1）、「負担である」と言い、「校務が忙しくなった」と回答している。「総合的な学習」を新設された「教科」ととらえ、担当教科以外にもう一つ教科が増えたという意識も強い。創設から4年が経過した現在でもその趣旨は、正しく、十分に浸透していないことが明らかになった。

一方、生徒の回答によると、「総合的な学習」では、「他の教科ではできないことができる」、「自分の興味・関心のあることをやってみよう」、「教室以外の場所でやる活動は楽しい」と思っている。しかしながら、「総合的な学習」

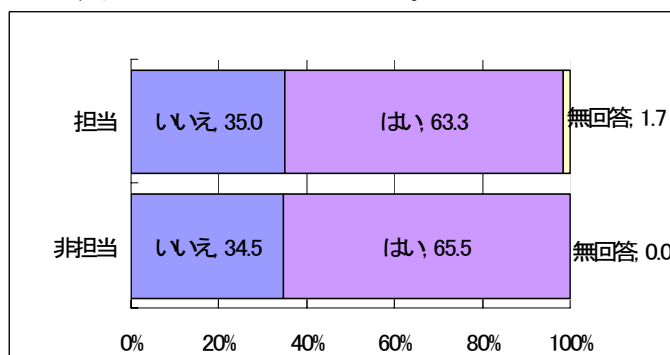


図1 「総合的な学習」を中学校で実践する事に難しさを感じているか（教師:n=115）

の中で困ったこと(図2)は、「課題設定」や「調べ学習」を強制されることだと回答しており、望まない課題学習が展開している実態や、その展開の過程で、決められた時間数内で「総合的な学習」を消化しようとする教師の姿勢も明らかになった。

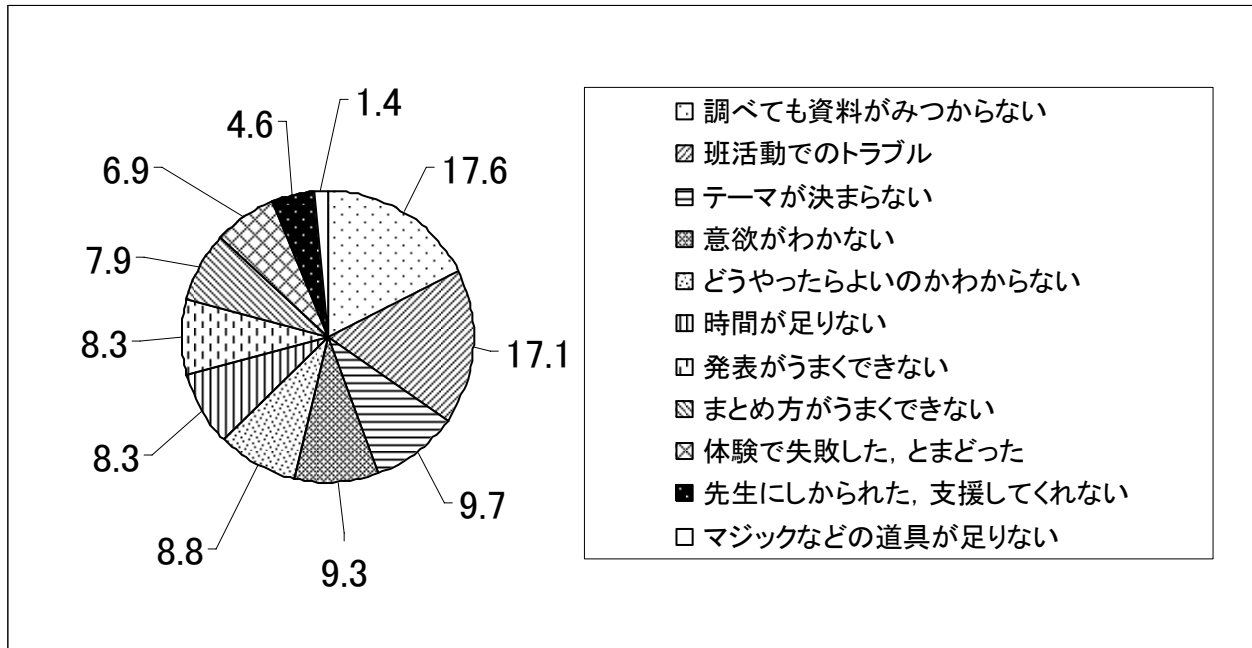
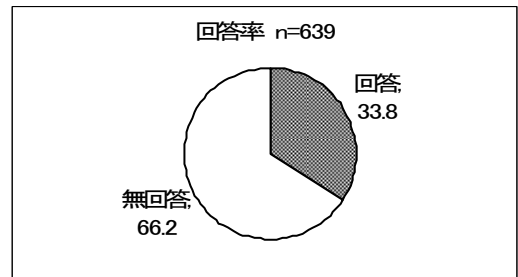


図2 総合的な学習で困ったこと(生徒:自由記述)



学習指導要領では、「総合的な学習」についてのねらいはあるが、詳細な目標や内容は示されていない。「総合的な学習」と各教科との関連も明確にされていない。系統的で一貫性のある新教科として設けられたのではない。また、「総合的な学習」の実施にあたっては、学校の独自性が協調されており、学校と教師・生徒に任されているのである。

だが、それに対する教師の姿勢は、消極的で批判的ですからある。『総合調査 2004』を回答した教師の中には、「(目標や内容がはっきりと示されなかったために) 判然としないまま文部科学省が実施に踏み切った」という感想や批判をもっている者もいる。

そもそも「総合的な学習」が目標や内容を示すにいたらず、創設されたのは、「総合的な学習」が子どもから出発するからである。子ども自身のすべての力を最大限に発揮し、様々な問題にぶつかっていくことで「生きる力」が培われていくからである。そこには、子どもたちの事実をとらえ、理解し、迫りうる教師の姿勢が存在するはずである。

そこで、このような実態を重くとらえ、中学校における「総合的な学習」の課題とその充実のための方策を見いだすことをねらいとする本研究のテーマ『中学校における「総合的な学習の時間」の課題と充実のための方策～「生徒と共に創る」という視点から～』を設定した。

「生徒と共に創る」、あるいは、「子どもと共につくる」授業の授業研究は、古くは、樋口勘次郎、及川平治、淀川茂重による実践がある。また、平野朝久の「はじめに子どもありき」や稲垣忠彦の研究は、子どもと創るカリキュラムの理論的な支えとなっている。実践や研究の多くは小学校で、中学校における実践や研究は小学校に比して非常に少ないが、その中で、愛知県東海市立上野中学校の実践は、生徒と教師による豊かな教育の軌跡として挙げるができる。

これらの先行研究を踏まえて、以下のような構成で論を展開した。

(2) 研究の展開(修士論文の概略)

【第1章 中学校における「総合的な学習」の実態】

第1章では、独自に行った『総合調査 2004』をもとに、東京都の中学校における「総合的な学習」の消極的な実態、「総合的な学習」がよく行われている学校とそうでない学校が存在する現実、そしてそこに内在する問題点を整理した。その問題点は、①教師が「総合的な学習」を新設された教科としてとらえていること、②教師主導の内容であること、③教師が生徒の目線に立っていないこと、の3点である。

【第2章 「教師主導」の総合的な学習の時間-東京都公立A中学校の事例-】

第2章では、『総合調査 2004』の回答校でもあるA中学校の平成17年度1～2学期の「総合的な学習」を取り上げ、第1章であげた問題点が具体的にどのような場面で見られるのかを見ていった。本事例は、「総合的な学習」が円滑に進まない学校の状況を明らかにしているとともに、「総合的な学習」を生徒と共に創ろうとする教師の意識と姿勢の欠落が最大の要因であり、それが「教師主導」の「総合的な学習」の典型を創り出しているということを描いた。さらに、本事例から、第1章であげた問題点に加え、④先の見えない指導計画に対する違和感をもっていること、⑤マニュアルどおりに指導しようとする傾向があること、の2点を加えた。

【第3章 「生徒と共に創る」総合的な学習の時間-東京都昭島市立多摩辺中学校の事例-】

第3章では、東京都昭島市立多摩辺中学校の「総合的な学習」の事例を取り上げた。この学校は、創設前より「総合的な学習」に関する研修・研究を重ね、創設後も常に「生徒と共に」「総合的な学習」を創ろうとしてきた。平成13～15年度は、生徒の学びの事実をとらえなおし、教師はいかに支援したらよいか、常に基本に立ち返り、教師と生徒が試行錯誤しながら「総合的な学習」を創り上げた。特に3年生による卒業研究「MYファイナル研究～15歳の決意～」における「新作和菓子の誕生」と「THE大道芸ボーイズ」の活躍は、消極的といわれる中学校での「総合的な学習」で、ここまでできるのかという驚きと可能性を示す実践といえる。

本事例は、①生徒自身が自分のカリキュラムを創り出していること、②教師が生徒の側に立つ実践の基本を貫いていること、③生徒の主体的な学びを導く仕掛けが随所に用意されていること、④教師が生徒を肯定的に評価していること、⑤授業の成果として生きて働く力の創出が見られること、など教師の姿勢が生徒の活動に与える影響と「生徒と共に」取り組もうとする教師の支援の在り方を示唆しているといえる。学習者の側に立つ指導観、「生徒と共に創る」という授業観、生徒は学ぼうとしているのだという子ども観、そういった視点が教師に要求されているのであり、「総合的な学習」における実践の基本でなくてはならないことを論じた。

【第4章 「総合的な学習」創設と中学校の状況】

第4章では、「総合的な学習」の趣旨と創設の経過を振り返り、創設前後、中学校ではどのように対応したのかを2つの学校の事例などからまとめ、実践の差を生み出した要因を探ってみた。その要因は、創設期における学校の対応の差異である。「総合的な学習」の趣旨やねらい・必要性・方向性を充分検討した学校と、そうでない学校とでは、その後の実践に大きな差があることがわかった。

本来、「総合的な学習」の創設により、学校に、教師に、パラダイムの転換を要求されていたはずであり、子どもの側から考える学校への再編、子どもの側にたつという教師自身の教育観の転換が必要だったのであるが、その趣旨が十分に浸透していなかった実態が浮き彫りになった。

【第5章 中学校の「総合的な学習の時間」充実のための方策】

第5章は、前述の問題点を踏まえ、「生徒と共に創る」という教師の視点から、中学校における「総合的な学習」の充実のための方策について述べた。その充実のための鍵となるのは、『生徒と共に創る』という視点である。教師がこの視点を大切にすることで、結果として生徒自らの学びを生み、学びの質が高まっていくことを、教師の授業観、生徒への見取りや支援などに焦点を当てながら考察した。

充実のためその方策には、「教師の意識の変革」が必要であることを指摘し、具体的に、①一斉授業からの脱皮が必要であること、②学習者の側に立つ指導が展開されなくてはならないこと、③生徒の学習活動を教師が共有すべきであること、④教師は生徒を肯定的に理解すべきであること、の4点を挙げ、具体的な授業場面での教師と生徒のやり取りを分析しながら論じた。さらに「授業づくりの視点」から①生徒の主体的な学習をはぐくむ環境を整えるべきであること、②感動的な出会いを仕組むこと、の意義を述べた。①については、中学校における生徒と教師が営む時間や学習空間を問い直し、豊かな学びをもたらす学習環境とは何か、「潜在的なカリキュラム」を論の中心にすえて考察した。さらに、「生徒と共に創る」視点は、「総合的な学習」に限らず、他の教科や領域においても可能であり、それが主体的な学習の鍵となることを社会科の授業事例を用いて述べた。

【おわりに】

おわりに、「総合的な学習」の創設が教師に求めているものは何だったのかを問い直し、「総合的な学習」が一人の人間の生き方に与える意味の大きい学びとなるべきことを述べ、まとめとした。

「総合的な学習」の創設が教師に求めているものの一つは、①一人一人の教師の大いなる挑戦である。その挑戦とは、従来の授業のスタイルを思い切って変える意識の転換であり、授業の質を変えるダイナミックな実践の展開である。そこには、生徒一人一人への問いかけを忘れない具体的な支援と、教師の魂がなくてはならない。

そして、次に求められているものは、②これまでの知識伝達的な一斉授業から脱皮し、学校・地域・生徒の状況に応じて、真に必要とされるものを吟味し、授業を構成していく構想力、生徒の学びをデザインする力、失敗や挫折覚悟で生徒たちと一緒にチャレンジする教師の姿勢である。本来「総合的な学習」は、マニュアルがあって、その通りに指導する授業ではない。教師にトップ・ダウンで下りてくる研修の成果がすなわち授業につながるというものでもない。

さらに③教師が「総合的な学習」をやらされているという意識をすて、能動的な自覚から出発することである。この自覚がなければ、どんなカリキュラムを作り、教材を工夫し、方法論を語っても、何の意味もないことになる。

本研究における「生徒と共に創る」という視点は、この教師の姿勢を支える実践の基本である。「総合的な学習」だけでなく、どの教科、どの領域においても大切にしなければならぬものである。それは、「総合的な学習」の時間が、授業だけでなく、生徒を変え、実践を通して教師を成長させる学習活動だからである。

II 学校等における研修成果の活用計画

本研究は、中学校における「総合的な学習」の実態に潜在する問題点を明らかにし、充実のための方策を教師の立場から、実践者の立場から明らかにしたものである。先行調査や研究で、十分に指摘・分析されてこなかった教師の意識や、学校観・授業観・生徒観など実践の基本にかかわる部分にも言及することが出来た。このことは、研究者の側の指摘とは一線を画すものであり、実践者の側からの指摘として非常に力強いと評価された。

本研究を進める中で、「総合的な学習」に対する意識や取り組みが多様であること、「総合的な学習」が学校教育に創設された意義を今ここで問い直す必要があること、「総合的な学習」の各学校での位置付けや取り組みを再認識することが必要であることを痛感した。おそらく、これまでの単純な取り組みをパターン化させたようなものは、一種の流行としていずれ形骸化してしまうだろうし、特に中学校においては、これまでの学習とのギャップを早く埋めなくては、本当の意味のカリキュラムは生まれまいであろうと考える。

これまで、「一実践者」として「総合的な学習」に取り組んできたが、今後は、「総合的な学習」を専門的に研究した者として、その意義を声高に述べていきたい。さらに、「総合的な学習」の趣旨を浸透させ、学校教育全体を変える可能性のあることを今後も実践をもって示していきたい。

また、2年間の大学院派遣研修で得られた研究成果は、私個人や勤務校だけに留めることなく、広く紹介できる機会を得、東京都の教育に貢献していきたいと考えている。

大学院派遣研修成果活用状況

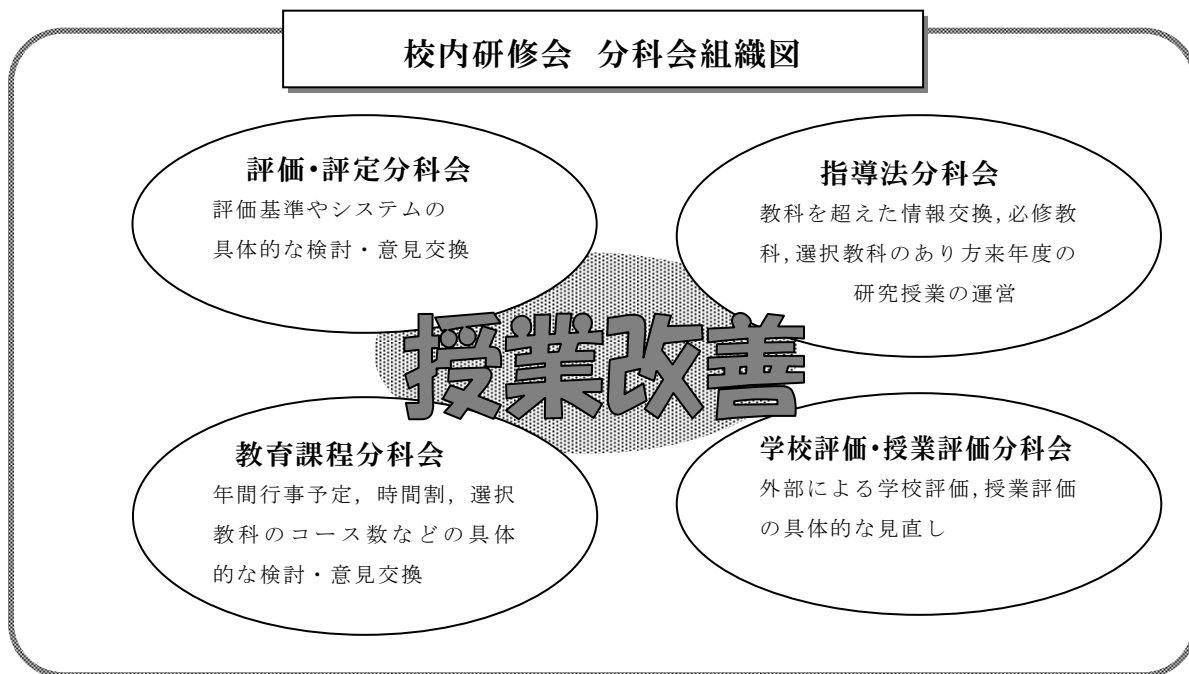
所属校	国分寺市立第一中学校	氏名	小玉 容子
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	学校教育・教育方法学
研究主題	中学校における「総合的な学習の時間」の課題と充実のための方策 ～「生徒と共に創る」という視点から～		

1 校内研修会の運営と見直し作業の推進

所属校での成果活用
校内の研究・研修主任として、平成 18 年度の『確かな学力のより一層の定着を図るための指導法の工夫～授業改善の推進と学校評価システムの確立をふまえて～』を主題とする「研究・研修主題，年間計画」を立案した。その予定に沿って，年度当初より，研究・研修をすすめてきたが，その過程で次のような意見や課題が確認された。

- 観点別評価から評定への総括の方法の再考が必要である。
- 授業改善の工夫と指導力・授業力の向上のためには，教科を超えた課題としてとらえるべきであり，相互の授業観察や研究授業を継続する必要がある。
- 授業時間の確保と行事予定・時間割の見直しおよび，選択教科のあり方を考える必要がある。
- 従来の評価項目を見直し，評価項目の重点化をはかる学校評価システムの構築を図るべきである。

以上を受けて，見直し作業をすすめ，全体会に 4 つの分科会を導入し研究・研修を推進した。



<p>2</p> <p>委員会・研修会での成果活用</p>	<p>国分寺市小中学校教育研究会発表会での研究授業の報告（社会科部会）</p> <p>場所 国分寺市いずみホール 日時 平成 18 年 2 月 15 日（水） 参加対象者 国分寺市立小中学校教職員・教育委員会 参加人数 324 名 内容 平成 17（2005）年 10 月 4 日（火）2・3 校時に行った気象予報士平井信行氏との連携授業「新日本・気候」について、授業のねらいや成果について以下のような内容を報告した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・気象予報士の平井氏の専門的な解説により、教科書の内容理解の深化が図られ、わが国の気候と自分の生活とのかかわりについての関心が高まった。 ・日本の気候の特色をさまざまなデータをもとに大観することで、日本各地の気候は、南と北だけでなく、太平洋側と日本海側、内陸部と臨海部などでも特色があることがわかった。また、その要因についてもさまざまなアクティビティを通して理解させることができた。 ・本授業での取り組みを通して、興味を持って自ら学ぼうとする態度を培うことができ、次の「調べ学習」に継続させることができた。
<p>3</p> <p>成果を生かした研究授業等</p>	<p>① 社会科教材の工夫（平成 18 年 10 月 27 日～11 月 1 日授業公開週間）</p> <p>授業対象：165 名（2 年 5 クラス・各 33 名） 授業内容：2 年社会科歴史的分野 『洛中洛外図屏風の世界～京都の町を歩いてみよう』</p> <p>教科書の記述内容の理解を深化させるために特設した発展的な内容の授業である。教材化したものは、歴史民族博物館（千葉県佐倉市）所蔵「洛中洛外図屏風」（左隻・右隻）のデジタル画像である。屏風の絵は、教科書や資料集にも掲載されているが、本授業では、描かれている人やもの・建物などから日本の四季や現在につながる生活習慣、生業などをより詳細取り上げてみた。生徒は、スクリーンに映し出された画像を見ながら、クイズ形式の問いに取り組んだ。答えを導き出すには、既習内容だけでなく、思考力や想像力も必要であり、全 30 問を最後まで興味深く、真剣に取り組む姿勢が見られた。</p> <p>講義式の一斉授業の教授法だけでなく、生徒が能動的に意欲的に取り組めるアクティビティを取り込むことは、社会的な事象に関心を持たせ、自ら考え、創造性を膨らませるきっかけになるのだと感想が、授業を参観していた保護者からも寄せられた。</p> <p>また、生徒による授業評価結果でも、「とてもよい」及び「よい」と回答した割合は、96.3%（149 人）であり、評価は非常に高かった。</p> <p>② 公開授業の実施</p> <p>授業日時：平成 18（2006）年 10 月 30 日（月）3・4 校時（午前 10 時 50 分～12 時 40 分） 授業対象：165 名（2 年 5 クラス） 授業内容：『そうだったのか天気予報』（3 校時） /『これが私の“晴れ晴れ人生”』（4 校時）</p> <p>平成 17 年 10 月に気象予報士平井信行氏と実践した社会科の授業「新日本・気候」に接続、発展させた社会・理科・総合学習の合科授業を 2 時間構成で行</p>

	<p>った。</p> <p>3校時目は、「そうだったのか天気予報」と題し、社会科「気候」の内容に「気象」の領域（理科）も取り入れ、授業を展開させた。</p> <p>実際に報道される番組ができるまでの数時間に気象予報士がどのような準備をするのか、通常見られない放送局内の画像やエピソードをもとに、天気予報が出来るまでのプロセスや気象予報士の仕事ぶりを具体的に見ることができた。まさしく、「そうだったのか・・・」という感想を多くの生徒がもつこととなった。また、天気に関することわざなどから日本人の生活には古くから天気が密接に関係していることを理解させることもできた。</p> <p>4校時目の総合的な学習の時間では、「これが私の“晴れ晴れ人生”」と題し、平井氏ご本人に焦点をあてた内容を展開させた。平井氏の小学校時代に抱いていた夢の話から、途中の挫折や苦勞、そして気象予報士になるまでの話、さらに、もっと上を目指そうとするこれからの意気込みを語る姿に、感動し、生徒たちは「いつかは自分も・・・」というあこがれや夢を思い描くことになった。</p> <p>この授業は、講演会としてではなく、11月に2日間実施する職場体験にむけて、人が働くことの意義や仕事の魅力について真剣に考えるよい機会となった。</p>
4 今 後 の 活 用 計 画 等	<ul style="list-style-type: none"> ① 校内研修会での資料提供，研究授業 ② 学校公開週間での授業公開 ③ 国分寺市小中教育研究会での資料提供・研究授業・発表 ④ その他の研究会・研修会での講師・助言